



[写真1 ブラジルの社会フォーラムでデモに参加しているインドの反差別運動グループ]

## 有機農法は未来のバイオテクノロジー？

マルチチュード運動の奔流の中で…

写真・文章 春日 匠

21世紀を迎えた国際社会は、同時に大きな価値観の転換期を迎えているように思われる。バイオテクノロジーではなく、伝統的な有機農法こそが第三世界における膨大な貧困層を救う技術かも知れない、という20年前であれば考えられなかったような議論が、真面目に議論されるようになってきたのである。こういった流れを考えることで、伝統知識の研究としての人類学にも新たな可能性と責務が生じているのではないか、ということをごここで考えてみたい。

「地域に根付いた草の根の運動が政治を変えるような社会になる」。メルッチなどの社会学者たちがこう指摘したのは、すでにずいぶんと昔のことのようと思われる。これは実は、先

進国だけのことではない。いや、むしろ第三世界のほうがより切実な社会問題を多く抱えているぶんだけ、こういった活動が盛んであるという側面もある。

イタリアの思想家、アントニオ・ネグリはこういった運動を「マルチチュードの運動」と呼ぶ。これまで、新しい草の根の運動の担い手は、市民(Citizen)や人民(People)と呼ばれてきた。それをポピュリズムと揶揄する場合は、大衆(Mob)ということばが使われる。それらの言葉が含意するのは、これら運動の主体がなんらかの特徴を共有していて、大きな枠で見れば共通の目的を持って行動しているという前提である。

もし運動の主体を「市民」と呼んだ場合、その目的は「公共性」である（従って、それはいい運動である）し、もし「大衆」と呼んだ場合、その目的はおそらく刹那的な快楽や直感的で間違った政治目的である（従って、それは悪い運動である）。1980年代に至るまで、メディアや知識人は、今日の前で起こっているデモが市民による運動なのか、大衆による暴動にすぎないのかを解釈する、特権的な地位を維持してきた。

ところが、1999年に米シアトルで行われた WTO 閣僚会議に付随して勃発した大規模な抗議運動は、それまでのデモとは、かなり趣が違っており、より複雑な解釈を要求するものであった。もっとも重要な点は、そこには様々な目的を持ったグループが混在していたことである。これを象徴的に「ウミガメとトラック運転手の出会い」とも呼ぶ。

ウミガメは当時 WTO を舞台に大問題になっていた環境問題の象徴であり、トラック運転手はアメリカで最も勢力のある労働組合を象徴している。つまり、それまではトラック輸送というのは環境運動家にとってあまり好ましいものではなく、いっぽうでアメリカにおいて典型的なブルーカラーと見なされているトラック運転手たちにとって、環境運動というのは恵まれた生活をおくる中産階級の贅沢の一種でしかなかったのである。

両者の関係はお世辞にも良好とは言えないはずであったが、ここで初めて共闘関係が発生したのである。そのほか、各種の NGO、労働組合、第三世界の開発運動家、米国内外のエスニック・マイノリティやセクシャル・マイノリティのグループ、ストリート・アーティストなど、各種の運動体がこの抗議運動に合流した。彼らを結びつけていたのは、共通の目的と言うよりは、ネグリが『帝国』と呼ぶもの、つまり超国籍企業(TNCs)と IMF や WTO のような国際機関によって均質化され、グローバル経済に漏れなく組み込まれた社会の出現への懸念であった。

この地域的あるいは歴史的に細分化された、異なる目的を抱きつつ、大枠でグローバル化に

対する反システム運動を担うような人々を、ネグリはマルチチュードと呼ぶのである。こういった抗議デモは、その後 WTO の閣僚会議や G8、APEC サミットなど、国際政治の主要なイベントごとに繰り広げられるようになった。

マルチチュードの存在はもちろん同時多発的であり、その運動は世界中に存在しているが、その起爆剤となっているいくつかの運動がある。そもそのモデルをつくったのはメキシコ・チアパス州を拠点とする EZLN (サパティスタ民族解放軍) による先住民蜂起であるとされる。



[写真2 土地なき農民運動のブースでは、多様な土着品種が誇らしげに展示されている]

ブラジルでは、土地を取り上げられてスラムに流入した農民らを組織し、大規模な酪農農園の一角を占拠して農地を確保する「土地なき農民運動」は、ブラジル最大の社会運動に成長し、後に触れる世界社会フォーラムや左派政権の誕生にも寄与した。

また、もう一つの重要な発火点はインドであり、ナルマダ・ダム群開発の反対運動、近代型の農業開発への反対と伝統農法の活用運動、南部ケララ州を中心とした住民自治の試みな

どが世界をリードする先進事例と見なされてきた。また、むろん先進国でもスペイン・バスク地方の労働者共同体モンドラゴンに代表されるような、いくつかの反システムの社会運動があり、多くの国際的な NGO ネットワークはこうした第三世界の運動をつなぐ役割を果たしている。

注目すべきは、先進国でも、第三世界に学ぶ事例が増えてきたことである。その最も有名な事例が、ブラジルの南部、ポルト・アレグレ市で開発された「参加型予算(Participatory Budget)」と呼ばれる手法である。

住民の直接参加による集会での討議と、この集会をベースにして選ばれた委員による決定で、市の予算の(一定部分の)優先順位を決め手いくという参加型手法は、結果として上下水道や教育など、貧困層のニーズに沿った事業への優先的な資金投入を質し、貧富の差が激しいことで悪名高いブラジルにおいて、貧困層の生活の向上に大きく寄与したとされる。興味深い点は、この方法論が、ラテン・アメリカの他地域だけではなく、スペインやドイツといった先進国の諸都市でも模倣され始めたことだろう。



[写真3 ブラジル南部の都市ポルト・アレグレ]

こうした活動が高く評価されたこともあり、ポルト・アレグレは世界社会フォーラムをホストすることとなる。1999年のマルチチュードの運動の流れを恒常的なものにするため、各国のNGOや労組など、社会運動体が集まって様々な問題を協議する場所を設けることが求められていた。これは、同時に、世界の名だたる大企業の経営者と政治的指導者が一堂に会する世界経済フォーラム（毎年1月にスイスのダヴォスで行われることから、ダヴォス会議とも呼ばれる）に対抗したものになることも企図されていた。そのため、この集まりは「世界社会フォーラム」と名付けられ、第三世界からの政治的イニシアティブで名をはせたポルト・アレグレで毎年行われることになった。

ここでもネグリらの言葉を借りれば、ダヴォスが「一月のブラジルの猛暑と、スイスの積雪とのコントラストは、ふたつの政治戦略が正反対であることを反映している。（中略）ダボスの会議派、少数のエリートに限定され、武装した護衛に守られている。他方、ポルトアレグレは、数えきれない参加者で、満ちあふれた催しである。ダボスは、山頂に封じ込められた狭い支配者たちに限られているのに対して、ポルトアレグレは、平原に広がる無限のネットワークなのである」（フィッシャー他編『もうひとつの世界は可能だ』日本経済評論社 p.6）。



[写真4 社会フォーラムで各地の水問題について報告する参加者たち]

こういったオルタナティブのための社会運動の、もう一つの焦点となっているのがインドである。ブラジル、インドはロシア、中国と並んで経済の面でも国際的な重要性を増している。ゴールドマン・サックスのレポートはこれらの国々を総称して BRICs と呼び、BRICs の経済力が、これまで世界の経済を支配してきた G7 諸国（米、日、独、英、仏、伊…）に匹敵するようになるのも間近であると論じた。

実際、BRICs の筆頭である中国の GDP はすでにフランスを抜き、純粋に経済力で見れば世界の五大国の地位に食い込んでいる。今年（2006 年）の一般教書演説で、米ブッシュ大統領は「激動の世界経済において中国やインドのような新たな競争相手を目の当たりにしている」と述べ、これらの国が重要性を増していることを指摘した。いっぽうで、巨大な人口を抱えるこれらの国の住民の圧倒的多数が、貧困と呼んでいいであろう生活レベルを余儀なくされる状況は、当面変わらないと予測される。

これらの国は、国内の貧困層を置き去りにして、経済競争に没入するのであろうか？ それとも、貧者に有利な「世界秩序の再構成」が行われるのだろうか？ 予測は現段階では困難

であるが、「非常に幸運なことに」（と、社会フォーラム会場である活動家は述べた）、少なくともインドとブラジルは、先進国と比較しても遜色ないぐらい、民主制と社会的議論という文化の発達した国である。識字率の低さや衛生環境など、多大な問題を抱えるこれらの国々であるが、同時にそうした人々を支える社会運動も、年々活発になってきている。

こうしたなか、2004年度の世界社会フォーラムは、10万人を超える参加者を集めて、インドのムンバイで開かれた（写真は開会式で演奏するパキスタンの人気ロックバンド Junoon）。



[写真5 開会式で演奏するパキスタンの人気ロックバンド Junoon]

こうした運動は、社会フォーラムのようなグローバルな運動と連携して、ネグリの言うマルチチュードの運動の国際的なネットワーク化に貢献している（ネグリはハートとの共著『帝国』などで、そのことの意義は必ずしも良い面だけではないとしつつも、基本的にはポジティブに評価しているように思われる）。

インドにおいて、この潮流の代表的な論客と見なされているのが環境学者にして活動家で

あるヴァンダナ・シヴァである。第三世界における穀物の大増産を可能にし、夢の技術と謳われたハイブリッド種子が、実はその陰で土壌を破壊し、水利権を巡る大小の紛争を生み出し、農村の荒廃の大きな要因にもなっていると指摘して世界を震撼させた『緑の革命とその暴力』（日本経済評論社）である。

現在、さらなる高収量を達成するために、遺伝子組換え作物の導入が世界各地で進められており、そのことが食の安全を巡る大きな議論を呼んでいる。しかしながら、食品としての安全性以上に重要であるかも知れない、社会的、あるいは環境的な問題については、必ずしも十分に議論されているとは言い難い面があり、その意味でも「緑の革命」の再現となってしまうことも危惧される。このことについても、シヴァは警鐘を鳴らし続けている。

また、現代社会の問題を鋭く告発するだけではなく、その代案となる持続的な開発を提示し続けてもいる。そのためにいくつかの団体を主催しているが、代表的なものに、科学と環境の問題を研究している「科学技術と環境財団」と、有機農法普及のためのナヴダーニャがある。インドの農村で有機農法の推進という話を聞けば、多くの人は少し意外だと思うのではないだろうか？

有機農法というと、すこしお金を持っている先進国中流階級の贅沢というイメージがつきまとう。しかし、インドなどの農村の最大の問題は、基本的な現金収入を持たない農家が、借金をして種子や農薬を買わなければいけないことにある。このとき、十分な収穫が得られればいいが、いったん不作であると、大きな借金を抱え込んだり、多くの場合担保とされる土地を失ったりすることになる。一方で、有機農法であれば、種子は前年のものを使えるし、肥料や農薬にお金を払う必要はなくなるわけである。これで軽減される経済的な負担は、実は非常に大きいのである。



[写真6 ナヴダーニャの実験農場]

しかし、有機農法が本当にインドにおける理想的な解決策かどうかは状況や地域にも依存する問題である。シヴァの運動は、北インドのデラ・ドゥン市郊外に実験農場を有して、米を中心に数百種類の土着品種を実験栽培、農民に無償で貸し出す種子バンクを運営している（農民は収穫後、バンクに種子を返還しても良いし、別の農民に種子を分けることで返還に代えても良い）。こういった運動形態は、シヴァのように国際的な著名人で、先進国からの助成金が潤沢に使えるから可能になるのだ、と論じることはもちろん可能である。

そこで、もう一つ参考になる事例がデカン・デヴェロップメント・ソサイエティ（DDS）という、南インドのアンドラ・プラデシュ州で被差別階層の人々が居住する地域で活動するNGOのものである。DDSはもともと、通信衛星などを利用した農村部の識字向上運動に従事していた人々を中心に組織されたNGOで、メンバーの活動を記録するために、被差別カーストの人々自身にビデオカメラを利用させるなど、進歩主義的な側面を持っている。

そういう運動体でも、有機農法の推進には非常に積極的であり、また一方で遺伝子組換え作物の導入には批判的である。ここでは、シヴァの運動体のように大規模な研究組織は持って

いないが、各村落の住民会議が種子バンクを管理することを推奨しており、60種類程度の種子が集められている。これらの種子が村落内外の農民に無償で貸し出されるのは、シヴァの運動と同様である。このような形で、有機農法は持続可能で分散的なやり方で、インドに広がり始めていると言えよう。



[写真7 A.P.州の農村の種子バンク]

インドのガンディー主義思想家アシス・ナンディが講演で、ガンディー暗殺犯はヒンドゥ原理主義の一員で、ガンディーの宗教的寛容などの進歩的な思想が気に入らなかったのだと説明されるが、実は暗殺犯は同様に、ガンディーが巨大ダム開発などのインドの急激な近代化に批判的であることにも怒っていたのだと述べたことがある。

ここで、ナンディは宗教的狂信と伝統主義の連結という、従来を前提を転倒させ、宗教的狂信と近代化の隠れた関係性を明らかにしようと試みているのである。

また、先に触れたブラジルの「土地なき農民運動」でも、比較的高齢の幹部たちは近代的な農業技術を利用した生産性の向上を望んでいるのに対し、現場で働く若い活動家たちは有

機農法への転換を主張し、意見が対立することが増えているという。こうした、「社会正義」を軸とした近代と伝統の対立の位相の変化は、マルチチュード運動を巡る、一つの特徴と言えよう。

いずれにしても、環境、経済、原理主義など「グローバルな問題」は、極めて現代的な問題として、世界中に同時多発的に現れている。しかし、同時にこれらの問題は、局所性や多様性を持っている。局所性、多様性、個々の歴史と文化による拘束性、そして生活に密着した認識の枠組みなどに着目するなら、マルチチュード運動は今後、文化人類学の課題として大きな意義を持っていると言えるのではなかろうか？